

厳密で正しいしきたりを遵守していくことは、新興の政治勢力に對抗し、自らの權威を維持し續けていくために必要なことであった。

最後の第十五から第十七章では、婚禮時や金曜禮拜時におけるフトバや、禮拜時に太鼓を叩くというカリフに屬する權利がブワイフ朝アミールに蠶食されていく次第が述べられている。

以上が、『カリフ宮廷のしきたり』のあらましである。

さて、本翻譯書の文體の特徴は、アラビア語にできるだけ忠實に邦譯しようとしている點である。本書が一般の讀者向けというより、専門家あるいはこのようなテーマに關心を寄せる者を對象にしていることが、その理由の一つにあげられるかもしれない。注も豊富である。注釋文にも出典が示されている。注の典據は校定本に基づくものや、譯者が文獻で確認したものが記されている。人物についての注は、殊に詳しい。

そして、注の位置が、本文ページと同ページにあるために、大變見やすくなっている。譯文の欄外に、校定本と寫本のページが書かれているが、それはページ数が横に書

かれているその行から、校定本と寫本のそれぞれどのページが始まることを示している。對照させて讀むのに便利である。

本書を利用してヒラールのアラビア語文を讀もうとする者や、研究に使いたいと思う者にとつて、本書は親切なつくりになっていて、そのような人たちへの寄與は計り知れないであらう。貴重でユニークな史料を邦語で通讀できることは、何よりも有難いことである。このような本が出版されたことを高く評價しつつ、續々と新たな譯注書が公刊されることを期待している。

二〇〇三年三月 京都 松香堂
A5版 二九十二頁 三八〇〇圓

安志輝主編

新方志『新河縣志』

森 時 彦

一九七〇年代末以降の改革開放路線のもと、中國では一九八〇年代初めから全國的に、人民共和國成立後第二次となる大規模な地方志編纂事業が本格化した。それから

はば二十年を経た二〇〇一年の段階では、省、市、縣三級の地方志が五、〇〇〇餘種、鄉鎮志、專業志、部門志、廠礦企業志などが二、〇〇〇餘種、そして地名志が一、五〇〇餘種、合計一九、〇〇〇餘種がすでに出版されていたという。中國社會科學院では、そのうち一五、五〇〇餘種を收集し、昨年、一、〇〇〇頁を超える大部の所藏目錄を出版した（中國社會科學院圖書館地方志收藏中心編『中國社會科學院圖書館新方志總目』吉林文史出版社、二〇〇二年三月）。

宋代から明清時代、さらに民國時期にかけて編纂されてきた地方志が、近世から近代にかけての歴史研究に必須の資料として珍重されてきたのと同じように、現在刊行中の新方志もやがては當該時期を研究するうえで、缺くことのできない資料を提供することになっていくであらう。これら二〇、〇〇〇種に近い數多の新方志の中から、取えて河北省の『新河縣志』（安志輝主編、方志出版社、二〇〇〇年七月）一種にしほつて紹介を試みるのは、他意はなく、おもに筆者の個人的な關心に基づくものである。

筆者は民國期の天津に集散する綿花の産地について分析していく過程で、西河綿の産地としてややマイナーではあるが、個別研究に適した特色をもつ新河縣に注目した。新河縣は河北省南部にあって、現在邢臺地區に屬し、「九河下梢」と稱される暴れ河、滏陽河の合流點に位置する縣である。滏陽河南岸沿いの北西部は低地で穀物栽培に適し、滏陽河から離れた東南部は砂地の高臺で綿花栽培がさかんであった。

この新河縣については、傅振倫（一九〇六—一九九九）という人物が、一九二八年に編纂した民國『新河縣志』という絶好の資料が存在した。傅振倫は當時、北京大學史學系において朱希祖のもとで劉知幾などの研究に従事していたが、新河縣旅平同學會の機關誌『新河月刊』に掲載した「修志芻議」、「新河舊志糾謬」、「深州風土記論略」などの文章が機縁となつて、二十歳そこそこで民國『新河縣志』の編纂を委ねられることになった。傅振倫はすでに十四歳の時に弟振榮とともに、生まれ育つた新河縣最南端の城召村を踏査して、『城召村史』（筆者未見）を編纂し、この村の沿革、戸口、土地、物産、賦税、人物、廟宇、古跡

などを記述したという。この「方志オタク」によつて編纂された民國『新河縣志』は、その當時から「新型地方志」（朱希祖の言）あるいは「民國方志の上乗」（黃韋の言）といった高い評價を受けていた。なかでも筆者にとつて貴重であつたのは、縣下の自然村一七五カ村すべてについて、一村ごとに一葉のスペースを割いて、おそらく傅振倫が實地調査をして作成したと思われる村圖とともに、特産品、市日、寺廟、住民の姓氏と由來などのデータが記録されていることであつた。さらに「社會經濟概況」の「戸口丁」には、すべての自然村について一八七五年（光緒元年）と一九二五年（民國一四年）、ちょうど半世紀を隔てた二つの時期の戸數と男口・女口が網羅されている。

これらのデータを奇貨として筆者は、清末から民國初めにかけての半世紀間における新河縣の人口動態を自然村レベルで把握することができた。そのデータを分析した結果、この期間に西北部と東南部の間で著しい地域差の生じたことが判明した。概して言えば、西北部の低地では、人口増加はさわめて緩慢で、多くの自然村では人口の

減少さえ見られるのに對し、東南部の高臺ではおしなべて人口増加が著しかった。その原因をめぐっては、いまのところ蓋然的な判斷しか示せないが、次の二點が考えられる。第一は、辛亥革命以降、天津を集散地とする國內外向けの綿花流通がさかんになり、新河縣からも滏陽河の水運を利用して綿花を出荷するようになった結果、綿作地帯である東南部が活況を呈したことで、第二に、清末から民國期にかけて頻發した滏陽河の氾濫によつて、西北部低地の自然村がしばしば壊滅的な打撃をうけたのに對し、小高いところにある東南部の自然村は氾濫の被害が比較的輕微であつたことが指摘できる。

このような見通しのもとに、二〇〇一年一〇月、武漢で開催された「紀念辛亥革命九十周年國際學術討論會」で簡單な報告（「辛亥革命前後河北省新河縣の人口動態」）——中國史學會編『辛亥革命與二十世紀的中國』中央文獻出版社、二〇〇二年八月）をしたところ、天津南開大學歴史系の李喜所教授が興味を示され、現代にまでタイムスパンを延長して分析を深めるようにとのアドバイスをいただいた上に、臨地調査の段

取りまでつけていただくことができた。二〇〇二年九月、南開大學での講義をすませた後、天津から四〇〇キロ餘り車を走らせ、新河縣に赴いた。飛び地の交換などで入れ替わりはあるものの、總數は現在も一七五カ村と變わりのない村々を回り、傳振倫の村圖と對照しながらいくつかの自然村についてこの一〇〇年の變容を目の當りにできたのは大きな收穫であつた。しかし筆者がもつとも期待していた自然村ごとの人口については、縣長が邢臺地區の縣長グループで華南巡視にをかけて不在だったこともあつて、殘念ながらデータを提供していただくことはできなかった。

その落膽を救ってくれたのが、歸國後ある書店を通じて取り寄せた二〇〇〇年七月出版の『新河縣志』であつた。多くの新方志は、ほとんど判で押したように人口志あるいは人口編などのチャプターを設けているにもかかわらず、人口データとしてはせいぜいで鄉鎮レベルまでしか収録していないのに對し、『新河縣志』は「政區建置」のチャプターで縣下一七五カ村の自然村すべてについて、簡単な由來と戸數、人口、耕地面積など一九八八年末現在のデータを

提供しているのである。早速これらのデータをインプットし、一九二五年（民國一四年）のデータと比較して、この六三年間における自然村レベルの人口動態について初步的な解析を試みたところ、清末から民國初めにかけての半世紀間における人口動態とはまったく正反對の現象が起こつていたことが判明した。綿作地帯である東南部の人口増加が停滯的であるのに對し、低地で穀物栽培に適した滄陽河沿いの西北部において人口増加が著しいのである。この逆轉現象については、一九六〇年代における滄陽河治水事業の完成によつて洪水の被害が輕減したこと、社會主義經濟のもとで農業生産の主力が商品作物の棉花栽培から穀物栽培にシフトしたことなど、いくつかの要因が想定されるが、今後さらに精密な考察を進める必要がある。ともあれ、農業國中國の社會をそのもつとも基層のレベルである自然村にまで踏み込んで分析できるデータが、一九世紀後半から現代まで一〇〇年以上のタイムスパンで比較可能になったことは、筆者にとつては長年來の宿願が一つ叶つたという思いがする。

ところで、自然村レベルのデータまで把

握できる點で、『新河縣志』は新方志のなかでは稀な存在であると先に記したが、これは事實の半面をとらえているにすぎない。一九八〇年代初めにおける新方志編纂事業の着手に先立ち、いわばその準備作業とも言える事業が全國的に始まつていた。一九七九年二月の「地名の命名、改名に關する暫行規定の通知」（國務院文件三〇五號）にもとづき、地名確定のための基礎作業として、全國各縣で「地名普查」が實施されたのである。多くの縣では、その過程で收集した基礎資料を『〇〇縣地名資料彙編』、『〇〇縣地名錄』あるいは『〇〇縣地名志』などの書名で出版した。冒頭に紹介した『中國社會科學院圖書館新方志總目』で、地名志、一、五〇〇餘種とカウントされているのがそれにあたるであろうが、多くは内部發行であつたため、中國國外にはあまり流布していないようである。筆者は江蘇省や安徽省に屬するいくつかの縣の地名志を目にする機會をえたが、いずれも詳細な地圖とともに、自然村レベルでその位置、地名の由來、特產品、戸數、人口、耕地面積など、各種データが網羅されていた。

ここ新河縣でも、一九八一年六月に「地

名普查」に着手し、一年半の時間を費やして四〇〇餘りの地名についてセンサスを行ったという。その結果えられたデータは、あの傅振倫の助言もえた上で、河北省新河縣地名辦公室編『新河縣地名資料彙編』（内部發行、一九八三年、傅振倫序）と題する冊子にまとめられた。この地名志は前掲の『中國社會科學院圖書館新方志總目』には收録されていないが、筆者は南開大學經濟學院、人口與發展研究所勞動經濟研究室主任、沈士倉先生のご好意でそのコピーを目にすることができた。データは一九八〇年末のものであったが、各自然村につい

ての記述はほぼそのまま、新方志『新河縣志』に繼承されたもののように見受けられた。

このような経緯を勘案すれば、ほかの多くの縣でも新方志編纂に着手した時点ですでに、縣下の自然村すべてについて、人口などの基本的なデータが整いつつあったものと推測される。しかし、ほかの多くの縣では新方志の編纂者たちは、人口志などの記述にあたって、せいぜいで郷鎮レベルまでのデータで十分であると判断したようである。それに對して新方志『新河縣志』の編纂者たちは、一九八八年末現在のデー

タに置き換えた上で、一七五カ村の自然村すべてについて、人口などの基本的なデータを漏れなく記載したのである。このような相違をもたらしたのは、やはりお手本としての民國『新河縣志』の體裁が、新方志の編纂者たちにつよく意識されていたことによるものと思われる。中國における地方志編纂というものの傳統の在り方をうかがわせる好個の事例と考え、敢えて簡単な紹介をこころみた次第である。

二〇〇〇年七月 北京 方志出版社
B5版 圖版・序・目錄四四頁 本文七一六頁